

平成 30 年度 子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書

児童館等における「遊びのプログラム」の  
効果の検証・分析に関する調査研究

主任研究員 岩田 紳也

早稲田大学 国際情報通信研究センター 客員主任研究員

平成 31 年 3 月  
学校法人 早稲田大学



## はじめに

厚生労働省において平成 30 年 10 月に「児童館ガイドラインの改正」が策定・公表された。それを検討した社会保障審議会児童部会「遊びのプログラム等に関する専門委員会」は平成 27 年 6 月に設置されたが、その「設置要綱」の項目 3 に「遊びのプログラム」の分析評価も主な検討事項の一つとして挙げられている。これは、今後児童館が実施するさまざまなイベントや行事、日常活動等のいわゆる「遊びのプログラム」に関して、新たなプログラムの開発と共に、それらの評価の必要性について言及されたものである。児童館の中心的事業である「遊びのプログラム」を改善し、より優れたものにしてゆくことは、子どもたちの健全な成長に資するだけでなく、児童館の運営面でも必要なことであり、今後はその評価方針や方法が問われてゆくことになる。

本研究は、児童館で実施されている「遊びのプログラム」について、今後どのように評価してゆくかを検討するために必要となる基礎データや関連資料等を、全国各地の児童館の現状調査や現地ヒアリング調査等を通じて収集し、その整理を行うことを目的とした調査研究である。

本研究を実施するにあたっては、現状認識という側面から、児童・子ども研究の分野のメンバーを中心に、それ以外のさまざまな分野からも専門家の招聘を行った。その一つが情報通信分野である。これは近年の子どもを取り巻く状況の中で最も大きく変化した部分である。インターネットに代表される情報技術の発達・普及によって、人々が膨大な量の情報に直接アクセス可能となった現在、子どもたちは家から出ることなく、手元の情報機器を駆使してゲームや SNS、ホームページ等のコンテンツを楽しむことが可能となり、それに伴って多くの知識だけではなく、そうしたコンテンツが持つ多様な価値観や思想を取得・共有するようになってきている。こうした子どもを取り巻く環境の情報化は、子どもが日常生活の中で行うさまざまな意思決定や行動にも大きな影響を与えることが懸念されている。また、社会活動を如何に評価するかという側面から、プログラム評価の専門家にも参加を要請した。現代社会では、多くの社会活動、特に税金が投入される公的活動についてはその評価について議論されることが多くなっている。我が国の児童館の大半が公設である点を踏まえ、「遊びのプログラム」の評価に関しても今後はこうした観点が必要となると考えた。今回の研究メンバーの約半数が、この調査研究への参画をきっかけとして、あらためて児童館活動について深く知る事となったと感想を述べている。そしてこれまでも児童館に関与してきた方々からも、従来とは異なる新たな視点や知見を得ることができ、また児童館で日々活動されている職員の方々の現状の客観的な検証・分析や、今まで見落とされていたような優れた点の掘り起こしにつながるとの意見を頂くことができた。

学際的なメンバー構成によってこの調査研究を始めるにあたっては、勉強会を重ねることで、「児童館の理念・目的とは何か」、「遊びのプログラムとは何か」という、本研究が目的とする調査の根本的な命題をメンバー間で共有する作業から進めた。この取り組みは児

児童館について専門外のメンバーが、本研究課題を理解・咀嚼するために必要なプロセスとして推進したが、結果として調査対象である「児童館等における遊びのプログラムとは何か」について定義付ける機会となり、本報告書を通して児童館活動の評価を捉え直すために求められる要件を明らかにすることができた点で有意義であった。

また、調査・研究の過程で、上記の勉強会で提起された幅広い視点からの仮説や可能性についての討議を行い、文献調査、児童館関係者等の専門家へのヒアリング調査、児童館視察、児童館スタッフや利用者とのインタビュー等を通じて、児童館における「遊びのプログラム」の効果の検証・分析についての要件を洗い出すことができた。研究チームによって明らかにされた「要件」が、実際の児童館現場において適切なものであるのかを検証するために、児童館の現場職員の方々や行政担当者を対象に「フォーカスグループ・ミーティング」を行い調査結果の再確認と意見交換を実施した。これらの検証結果、研究チームが導き出した要件は児童館職員の方たちの指針となり、彼らの活動の適否を振り返り、その内容をより良いものへと導いてゆく可能性が高いことが確認された。

本報告書の目的は、今後、「児童館等における『遊びのプログラム』の効果の検証・分析方法の確立」に資するための基礎調査である。本調査・研究報告書が次のステップである「評価基準作り」に寄与することを期待する。

最後に、本研究に協力してくださった全国の児童館の方々にこの場を借りてお礼を述べさせていただきます。

平成31年3月31日

早稲田大学 国際情報通信研究センター  
客員主任研究員 岩田 紳也

# 目次

はじめに

序章	調査研究の目的と方法	1
1	調査研究の目的	1
2	調査研究の方法	1
3	調査研究における倫理面への配慮	3
4	調査研究の体制	4
5	成果の公表方法	5
第1章	「遊びのプログラム」の考え方	9
1	「遊びのプログラム」と児童館におけるプログラムの評価研究	9
2	児童館における遊びの考え方	14
3	先行視察等の結果	33
第2章	近接領域における評価に関する先行研究・事例の検討	47
1	子どもの放課後に対する主な取り組みとその評価に関する先行研究の現状	47
2	プログラム評価	52
第3章	調査結果	77
1	児童館訪問調査	77
(1)	児童館訪問調査の内容と方法	77
(2)	児童館訪問調査の結果	79
①	宮城県石巻市子どもセンター「らいつ」	79
②	新潟県立こども自然王国	96
③	長野県松本市 寿台児童館	105
④	愛知県児童総合センター	116
⑤	京都市 明德児童館	127
⑥	神戸市 六甲道児童館	137
⑦	愛媛県久万高原町 NIKO NIKO館	153
⑧	福岡市立中央児童会館「あいくる」	163
(3)	児童館訪問調査結果の考察	179
2	利用者アンケート調査	180

(1) 利用者アンケート調査の内容と方法	180
(2) 利用者アンケート調査の結果	181
① 児童向けアンケートの結果	181
② 保護者向けアンケートの結果	184
(3) 利用者アンケート調査結果の考察	192
3 元利用者へのヒアリング調査	193
(1) 元利用者へのヒアリング調査結果	193
① 今井 八彩	193
② 中村 興史	197
(2) 元利用者へのヒアリング調査結果の考察	202
4 児童館関係有識者へのヒアリング調査	204
① 植木 信一	204
② 大竹 智	206
③ 柳澤 邦夫	207
第4章 提言	215
1 提言にあたって	215
(1) 「児童館ガイドライン」との関わり	215
(2) 児童館活動の評価と実践記録について	215
(3) 「プログラム評価」について	217
(4) 「情報ネットワーク社会と子ども、児童館」について	217
2 提言	222
(1) 「遊びのプログラム」検証の視点	222
(2) 支援者のゆらぎと実践記録	223
(3) 振り返りの軸としての児童館ガイドライン	223
(4) 気づきと支援者の自立・成長	224
(5) 協働的省察的实践の場としての「鏡のホール」	225
(6) 実践記録とその共有のための枠組み	225
調査研究を終えて	228
参考文献	230
資料編	235
資料1 児童館ガイドライン	237
資料2 先行視察のまとめ	251

① 練馬区平和台児童館	251
② 港区麻布子ども中高生プラザ	254
資料3 児童館長・職員等へのヒアリング項目	260
資料4 利用者アンケート調査票	263
資料5 利用者アンケートの自由記述	268
執筆分担	282
謝辞	283

